

# 中日异议表达行为对比研究

不一致応答における  
日中対照研究

王玉明◎著



中国出版集团



世界图书出版公司

本书受中央高校基本科研业务费项目[项目编号：DUT15RW119]资助。

# 中日异议表达行为对比研究

不一致応答における  
日中対照研究

王玉明◎著



中国出版集团  
世界图书出版公司  
广州·上海·西安·北京

## 图书在版编目 ( CIP ) 数据

中日异议表达行为对比研究: 日文/ 王玉明著. —广州: 世界图书出版广东有限公司, 2015. 8

ISBN 978-7-5192-0156-2

I. ①中… II. ①王… III. ①汉语—语言表达—对比研究—日语 IV. ①H146.3 ②H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 208297 号

## 中日异议表达行为对比研究

---

策划编辑 孔令钢

责任编辑 黄琼

助理编辑 董春玲

出版发行 世界图书出版广东有限公司

地 址 广州市新港西路大江冲 25 号

[http:// www.gdst.com.cn](http://www.gdst.com.cn)

印 刷 北京振兴源印务有限公司

规 格 710mm×1000mm 1/16

印 张 14

字 数 200 千

版 次 2015 年 8 月第 1 版 2015 年 8 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-5192-0156-2/H·0975

定 价 46.00 元

---

版权所有, 翻版必究

はしがき

語用論研究が脚光を浴びせられて以来、言語行動に関する研究や言語行動の比較研究などが注目されてきた。依頼、勧誘、ほめ、謝罪などの言語行動が目的達成に関わるため注目を集められ、盛んに行われている。一方、私たちが日常生活を営む上で頻繁に遭遇する、人の言ったことに対して否定的に応じる不一致応答は目的達成に直接に関わらないが、相手のネガティブフェイスを脅かすため、コミュニケーションに摩擦や誤解を招きかね、さらにその後の人間関係の悪化にもつながりかねない。本書は中国語場面、日本語場面及び接触場面の中国人学習者における不一致応答の特徴に着眼し、「同調性」、「会話構造」、「不一致応答ストラテジー」、「言語表現」などの視点から、中国語と日本語における不一致応答の特徴を明らかにし、さらにネウストプニーの言語管理理論に基づき接触場面における中国人学習者の不一致応答に対する管理と形成要因の解明を研究目的とする。この研究は不一致応答研究をなさる方、また言語行動研究をなさる方、そして日本語教育に携わる方々に少しでもお役に立てば、大変うれしく思う。

本書の企画にあたっては、多くの方々のご支援とご協力を得た。多大なご支援と有益な助言をいただいた日本千葉大学の村岡英裕先生、調査とインタビューに快く協力して下さった日本と中国の調査協力者、励まして下さった村岡ゼミの皆様、深く感謝したい。また、煩瑣な編集の労を取られた中国図書グループの編集者孔令鋼氏にお礼を申し上げたい。

本書は中央高校基本科研究業務費の助成を受けて行われたものであることをここに付記し、感謝を申し上げる。

王玉明

2015年4月

## 目次

第1章 序論 .....	1
第2章 理論基礎と研究方法 .....	16
第3章 日本語母語場面における不一致応答 .....	74
第4章 中国語母語場面における不一致応答 .....	108
第5章 日本語接触場面における不一致応答 .....	140
第6章 中国人学習者が不一致応答に対する管理 .....	187
第7章 結論 .....	206
参考文献 .....	212

# 第1章 序論

## 1.1 はじめに

近年、コミュニケーション能力を高めるための日本語教育という考え方が重視されてきており、日本語学習者が円滑にコミュニケーションを行うために、文法能力だけでなく、対人関係を調整していく能力も必要であると考えられてきている。これに伴い、日本語学習者や日本語母語話者による比較研究も多くなされてきており、例えば、依頼、勧誘、ほめ、謝罪などの場面における、日本語母語話者と学習者の比較研究は盛んに行われている。しかし、私たちが日常生活を営む上で頻繁に遭遇する、人の言ったことに対して否定的に応じたり、人と異なる意見を述べたりするといった、会話参加者間になんらかの不一致が生じた会話場面に関する研究は、まだ、十分には行われていない。Brown & Levinson (1987) によると、不一致応答は相手のネガティブ・フェイスを脅かす FTA 行為であり、会話中に生じた不一致に円滑に対応できなければ、コミュニケーションにおける摩擦や誤解が生じ、さらにはその後の人間関係の悪化にもつながりかねない。

対人関係の調和を重視するとされる日本語において、会話中、不一致が生じた場合、どのように応答していくのか、また、中国語においては、不一致にどのように応答しているのか、さらに、中国人学習者が日本語の会話において不一致に直面し

た場合、どのような応答ストラテジーを選択しているのか、などは興味深い問題である。よって、本研究では、日本語母語場面、中国語母語場面、日本語接触場面という3つの場面における不一致応答に焦点をあて、日本語母語場面と中国語母語場面における不一致応答の相違を見出したうえで、日本語接触場面における中国人学習者による不一致応答の傾向とその傾向が形成される要因を明らかにしたい。

## 1.2 不一致応答に関する先行研究

ここで、今までの不一致応答に関する研究を不一致応答の定義、日本語母語話者の不一致応答研究、日本語と外国語との対照研究、日本語教育の立場からの研究などの視点から紹介していく。

### 1.2.1 不一致応答の定義

不一致応答に関する研究を概観する前に、まず不一致応答とは何か見ておく必要がある。不一致応答に関して、用語は統一されておらず、従来の研究では「コンフリクト」(ジョーンズ 1993、本田 1998、1999)、「反対意見」(平野 2004、李吉鎔 2001、2003)、「不同意」(末田 2000、大塚 2005、王 2010、2011)、「不一致」(大津 2001、黄 2004、王 2006、楊 2010、2011、2012) などといった多様な用語が使用されている。

それらの用語に対する定義づけも、それぞれの研究で試みられている。例えば、

ジョーンズ (1993) は「意見の対立、衝突」を、本田 (1999) は「討論参加者間の対立行為」を「コンフリクト」と呼んでおり、李吉鎔 (2001: 20) は「聞き手にすでにある意見が存在していることを前提とし、反対意見を表明することによって、聞き手の意見や行動を規制するもの」を、平野 (2004: 96) は「話し手が他の会話参加者に対して、不賛成や非難、反論、挑戦などの否定的評価を表明する際に用いる実質的な発話」を「反対意見表明」と呼んでいる。また木山 (2006: 254) は「相手の発話が表す事実あるいは意見について、納得しない、または受け入れていないことを伝える発話 (群)」を、王 (2011: 606) は「ある会話参加者が他者のある事実情報に対する認識、ある物事に対する意見や評価と異なる意識、意見や評価を持つときに行う、不賛成や非難、反論、否定の意味や害を持つ言語行為及び非言語行為 (笑い、沈黙など)」を「不同意表明」と呼んでいる。そして大津 (2001: 211) は「摩擦の原因となる、参加者間の思考内容のくいちがい」を、楊 (2012: 91) は「ある事実情報の真偽についての認識や、ある物事に対する評価、感想などにおける会話参加者間の考えのくいちがい」を「不一致」と呼んでいる。用語の多様性は考察の対象や範囲が異なることを意味している。上記の定義に示しているとおり、意見の対立だけに焦点を置くものもあれば、事実情報や認識、評価なども考察の対象とするものもある。しかし、それらの研究対象は会話参加者間に何らかの「くいちがい」が存在していることで共通していると言える。

### 1.2.2 日本語母語話者の不一致応答

日本において不一致応答が初めて注目されたのは1990年代であり、21世紀に入ってからだんだん関心を集めるようになった。この節では、日本語母語話者の不一致応答を、発話構造、実現形式、ストラテジー、談話構造、不一致応答に影響を与



える要因、不一致応答の効果などの視点からそれぞれ見ていく。

### (1)不一致応答の発話構造

不一致応答の発話を一つの単位として捉え、その内部の構造を探るものには、王 (2006)、倉田・楊 (2009) などがある。王、倉田・楊<sup>1</sup>によると、不一致応答の発話には、まず不一致の意向を示す中核となる「中心遂行部」<sup>2</sup>があり、そして中心遂行部に先行し、導入の準備の役目を果たす「前部」、前部の前に現れる談話の境界、聞き手が話し手からターンを取り、発話を始めるマークを表す「合図」と、中心遂行部の後に付け加えられ伝達内容に対して補足をする役目を果たす「後部」があると論じている。そして中心遂行部は義務的な要素であり、合図、前部、後部は選択的な要素であるとしている。

### (2)不一致応答の実現形式

不一致応答は相手のポジティブフェイスの欲求を脅かす FTA 行為であるため、「話題に関する情報の保有度、対人関係の維持・発展、自己表出の達成、などの要素や目的を考慮しながら様々な形で」(楊 2011 : 73) 表明すると考えられる。この節ではマクロレベルにおける不一致応答の実現形式について今までの研究成果を見ていく。

初期の研究段階では、顕在化された不一致応答にのみ焦点が当てられ、実現形式は直接的と間接的に分類されている(末田 2000、木山 2005)。その後、潜在化された不一致応答も考察の対象となり、不一致応答の実現形式が直接的な応答、間接的な応答、回避的な応答に分類されている(王 2006<sup>3</sup>、楊 2011<sup>4</sup>)。日本語母語話者は間接的な応答をする傾向があると指摘されている。

一方、平野 (2004) は、「度合い」という概念を用い、単位方略<sup>5</sup>の視点から不一致応答の実現形式を「否定型」「指摘型」「情報要求型」「共感期待型」<sup>6</sup>といった四つのタイプに分けている。前の二つは明示的で、後ろの二つは暗示的で、暗示の度


合いが「否定型」「指摘型」「情報要求型」「共感期待型」の順にだんだん高くなるとしている。王（2011）はさらに「否定型」「指摘型」「発話要求型」<sup>7</sup>「共感期待型」の後に、「相手の見解と対立することを避けるように言葉で意見や評価をごまかしたり、非言語なもので不同意を暗示したりする」ものを「回避型」として付け加えた。平野によると、日本語母語話者による方略は暗示的で、共感期待型が最も多かったという。また、王も日本語母語話者はなるべく意見と評価の不一致を回避し、より多くの暗示的な言い方を使うことを指摘している。

上述のように、今までの研究では二とおりの分析の枠組みがあり、各実現形式の用語は統一されていない。また、直接的であるか間接的であるかについての分類基準も多少異なる点が見られる。例えば、末田（2000）と王（2006）は、相手の推測が必要であるかどうかを基準に直接的、間接的という用語を使用し、分類しているため、「たぶん」「ようだ」「じゃないですか」などのような言語表現形式の使用により緩和された不一致応答を直接的表明として扱っている。一方、楊（2011）などは、不一致をほのめかすものだけでなく、程度副詞や疑似的疑問「じゃん」「じゃないですか」などの使用により緩和された不一致応答を「婉曲的な応答」として扱っている。今後、実現形式の用語と分類の基準について統一された枠組みの整備が期待される。

これまでの研究を踏まえ、不一致応答の類型を次の表 1-1 のようにまとめることができる。

表 1-1 不一致応答の実現形式

単位方略	説明	度合い
否定型	不一致に対し明示的に否定・反対する	明示的 (直接的)
指摘型	立場が対立するような事実や情報を提供する	
発言要求型	相手に情報や意見を要求することにより、暗に不一致を伝達する	暗示的 (間接的)
共感期待型	論題と関係ない情報や自分の感想を述べることによって相手からの共感を期待する	
回避型	言葉や非言語的なもので不一致をごまかしたり、流したりする	回避



平野 (2004) と王 (2011) を参考に作成

(3) 不一致応答のストラテジー

前の節ではマクロレベルにおける不一致応答の実現形式について概観してきた。この節では、ミクロレベルにおける不一致応答の具体的な実現形式を「発話レベルにおけるストラテジー」と「言語レベルにおける緩和ストラテジー」に分けて見ていく。

① 発話レベルにおけるストラテジー

A 明示的なストラテジー

明示的なストラテジーは、相手の立場に対して明示的に否定・反対する「否定型」と立場が対立するような事実や情報を提供する「指摘型」の2種類に大別できる(平野 2004、王 2011)。「否定型」には「マイナス評価」「不一致の表明」(王 2011)などのストラテジーがあり、「指摘型」には「見解の表明」「情報や事実の提供・説明」(末田 2000、王 2011)などのストラテジーがある。各ストラテジーの例は次の表 1-2 のとおりである。

表 1-2 明示的ストラテジーとその実例

ストラテジー	単位方略	説明	例 <sup>B</sup>
否定型	マイナス評価	好ましくない評価を下す	それおかしいよ。
	不一致の表明	相手の見解に対して不一致を表す	あんまり行きたくないかも
指摘型	情報や事実の提供・説明	必要または有用な情報や事実を伝える	人から聞いた話ではそのホテルあまりよくないらしいよ
	見解の表明	事態について自分の判断を述べる	もう少し色が明るくてもいいかもね

王 (2011) に基づき作成

### B 暗示的なストラテジー

暗示的なストラテジーは、相手に情報や意見を求めることにより暗に不一致の意図を示す「発言要求型」と、論題と関係ない情報や自分の感想を述べることで相手からの共感を期待する「共感期待型」の2種類に大別できる(平野 2004、王 2011)。「発言要求型」には「情報提供の要求」(末田 2000、平野 2004、王 2011)のほか、「確認要求」「評価や見解表明の要求」(王 2011)などのストラテジーがある。「共感期待型」には「情報の叙述」「感想の叙述」(平野 2004、王 2011)などのストラテジーがある。暗示的なストラテジーに見られる単位方略とその例をまとめると表 1-3 のようになる。

表 1-3 暗示的ストラテジーとその実例

ストラテジー	単位方略	説明	例
発言要求型	情報提供の要求	未知の情報を与えるよう求める	それで、M だめですか
	確認要求	先行発話を正確に理解するために確認を求める	・ そうですね？ ・ 本当 ↑
	評価や見解表明の要求	事態について評価・意見・判断などを述べるよう求める	・ ほかの人はどう思いますか。 ・ ん ↑ 関係ある ↑
共感期待型 <sup>9</sup>	情報の叙述	必ずしも必要でない情報に言及し理解や共感を期待する	・ うーん、やっぱ因みに去年やった時は…用意した覚えがある
	感想の叙述	事態に対して感じたことを述べる	・ 勢いがないと辛いわねー

王 (2011) に基づき作成

### C 回避ストラテジー

回避ストラテジーは、「言葉で表明するもの」と「言葉で表明しないもの」の 2 種類に大別することができる (王 2006、王 2011)。言葉で表明するものには、「態度保留」「話題の移転」「見せかけの同意」(本田 1999、王 2006、楊 2011、王 2011) のほかに、「妥協案の提出」「中立的評価や意見」「別の案の提示」(王 2011)、「共感の叙述」<sup>10</sup> (大津 2001) などのストラテジーもある。言葉で表明しないものには、「沈黙」(王 2006、王 2011) のほかに、『『あー』などの感嘆詞「笑い」(王 2011) などのストラテジーもある。

## ②言語表現レベルにおける緩和ストラテジー

前節では発話レベルにおけるストラテジーを見てきたが、言語表現レベルにおいて不一致の存在を曖昧にし、共感的な雰囲気をつくるのを防ごうとする緩和ストラテジーも多く観察される。緩和ストラテジーは、直接的（明示的）応答にも多く使用されている。例えば「もう少し色が明るくてもいいかもね」という発話は直接的な応答であるが、「かも」を使用することで不一致の衝撃を和らげる。緩和された言語表現形式について考察した研究には、本田（1999）、大津（2001）、王（2006）、大塚（2005）などがある。これまでの研究成果を踏まえると、言語表現形式における緩和ストラテジーを「緩和マーク」「自分の考えの不確かさを示す」「相手との差が小さいことを示す」「文末をぼかす」の4種類に分類できる。

「緩和マーク」には「あの、えー」（本田 1999）、「えーとね」「なんか」「うーん」「まあ」（王 2006）、「んー」（大塚 2005、王 2006）のような言いよどみ、ポーズや笑い（本田 1999）、「えええー」「え？」のような驚きを表す表現（大塚 2005）がある。

「自分の考えの不確かさを示す」には、「ようだ」（大津 2001、王 2006）「らしい」「みたい」「そうだ」などといった徴候性判断表現（王 2006）、「たぶん」「かもしれない」（大津 2001、王 2006）などといった蓋然性判断表現（王 2006）、「私」「と思う」（大津 2001、王 2006）「と感じる」「感じがする」「という感じ（感覚）」「気がする」（王 2006）などといった個人性を強調する表現、「（よ）ね」「だろう」「でしょう」「じゃないか」（王 2006）や音調によって質問の形式をとる（大津 2001）などといった疑似疑問がある。

「相手との差が小さいことを示す」には、「あんまり」「ちょっと」（大津 2001、王 2006）「そんなに」（王 2006）などといった程度副詞や、受け入れ+「けど」（大津 2001、大塚 2005）などといった不一致を表明する前後の前置きやつけ足しなどの方策がある。

「文末をぼかす」には、「未完結文」と「けど終止文」（王 2006）がある。

表 1-4 言語表現形式における緩和ストラテジー

緩和ストラテジーの分類		言語表現形式例
緩和マーク	発話の初めのマーク	「あの、えー」「えーとね」「なんか」「うーん」「まあ」「んー」のような言いよどみ、ポーズ、笑い、「えええー」、「え？」のような驚きを表す表現
自分の考えの不確かさを示す	徴候性判断表現	「ようだ」「らしい」「みたい」「そうだ」
	蓋然性判断表現	「たぶん」「かもしれない」
	個人性を強調する表現	「私」「と思う」「と感じる」「感じがする」「という感じ(感覚)」「気がする」
	疑似疑問	「(よ)ね」「だろう」「でしょう」「じゃないか」や音調によって質問の形式をとる
相手との差が小さいことを示す	程度副詞	「あんまり」「ちょっと」「そんなに」
	不一致を表明する前後に前置きやつけ足し	受け入れ+「けど」
文末をぼかす	未完結文	文を言い切らず動詞の連用形「て」で終わる
	「けど」終止文	文末に言い差しを表す接続助詞「けど」などを使用する

(4) 不一致の談話構造

今までの研究では、不一致に遭遇してから話し手が如何に不一致を表明するかと

いう発話レベルに焦点を当てるものが多く、談話レベルにおいて会話が如何に展開していくかについての研究は少ない。その中で末田（2000）は、不同意表明と調整のストラテジーの実現形態を考察することで、ミクロな視点から会話展開の相互作用を考察し、「能動的な調整」の使用頻度により、会話が「双方向の会話展開」と「一方向の会話展開」を生み出すことを指摘している。そして、木山（2006）は、儀礼的不同意に焦点を当て、雑談における不同意の相互作用を考察した結果、相手が謙遜したことに対しては不同意し、またそれに対して再び不同意をするというパターンが日本語における初対面同士の会話の基本状態を成していると結論付けた。上記の研究を踏まえた上で、談話レベルから不一致会話が如何に展開していくか、また不一致会話において人間同士の相互作用がどのようになされているかなどのメカニズムの究明が今後の課題となっている。

#### (5) 不一致応答に影響を与える要因

Brown & Levinson (1987)は、フェイス・リスクを脅かす危険性のある言語行為を行う際に、話し手がどのようにそのフェイス・リスクの大きさを算定するかを提案した。それによると、フェイス・リスクの大きさはその行為の負担の度合い、話し手と聞き手との社会的な距離、両者の力関係といった三つの社会的要因にかかわるといふ。この節では不一致応答に影響を与える要因に関する研究を見ていく。

大津（2001）は、負担の度合（不一致の内容）を変数として、不一致を表明する際の緩和処置について考察し、負担の度合いの高い「評価の不一致」を表明する際には、負担の度合いのより低い「事実確認の不一致」、「意図と解釈の不一致」を表明する時より、緩和方策の種類が多いことを明らかにした。

心理的距離（親疎関係）を変数に同輩同士のフォーマルな相談場面を考察した王（2011）は、話し手と聞き手の関係の遠い場合は暗示的な言い方を、話し手と聞き手の関係の近い場合は明示的な言い方をするとしている。

日本語による不一致応答はフォーマルな場面とインフォーマルな場面により明瞭



な相違が見られないと李（2003）、王（2011）は結論付けた。

日本語において、親疎関係と不一致の内容は不一致応答に影響を与えるが、場面（フォーマル・インフォーマル）はさほど影響を与えないことが、今までの研究により分かった。しかし、不一致応答に影響する要因には、親疎関係や不一致の内容以外にも、上下関係、男女、年齢、不一致の対象など、他にも多くあると考えられる。また、多くの要因の中にどの要因が最も大きく不一致応答に影響を与えるかについても未解明である。今後は不一致応答に影響を与える要因の相関性研究が期待される。

#### (6) 不一致応答の効果

不一致応答の影響や働きに関する研究はまだほとんどされておらず、管見の限り論及されたのは平野（2004）だけである。平野は課題達成という共通の目的を持った長期に亘る話し合いでは、反対意見表明は単なる FTA としてコミュニケーションに摩擦を引き起こすものではなく、議論を精緻化させ、より効果的な結論生成をもたらす働きを持つことを指摘している。今までは、不一致応答が相手のフェイスを脅かす危険性のある行為として取り上げられているが、人間関係または談話の目的にどのような影響をもたらすかについては、まだほとんど研究されていないのが現状である。

### 1.2.3 日本語と外国語との対照研究

李（2001）は、実験形式のインタビューによるまとまった反対意見表明の発話について談話構造を考察した結果、日本語における談話は 8 割～9 割以上「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」という同一パターンの談話構造を有するのに対し、韓国語の談話の場合は、比較的自由に談話を構成していくものが多く、「談話